

視覚的な支援の工夫から、生徒の考えの変容と自己形成につなげる
～放送教材と読み物教材の活用を通して～

松山市立三津浜中学校
教諭 宮内 侖

1 主題について

本学級は自閉症・情緒障がい学級で、女子1名、男子3名が在籍している。

どの生徒も社会的で他者との関わりを好んでいるが、自己中心的な考えとなることが多く、物事の判断においては好き嫌いなどの感情に左右されることがある。また、一度に多くの情報を提示されると情報が混在してしまい、落ち着いて判断できないこともある。

本実践では放送教材や読み物教材を活用した学習を通して、生徒への視覚的な支援を意識した授業を行っていく。その上で、読み物教材など聴覚的な支援を中心とした授業と、放送教材など視覚的な支援を中心とした授業では、生徒の気付きや考えにどのような変容があるかを比較していく。

また、生徒の考えの変容を通して、自分の考えの基本となるものや信念に気付かせ、自己形成や社会における一員としての自覚が芽生えることを期待した。

2 研究内容

(1) 対象 特別支援自閉症・情緒障がい学級4名

(2) 教科 特別の教科 道徳

(3) 研究の視点

① 生徒への情報提示や思考に対する支援の手立て

ア NHK for School や I C T 機器の活用など、視覚的な支援の実施

イ 読み物教材と、教師のロールプレイングによる読み聞かせなど、聴覚的な支援の実施

② 道徳の各内容項目について考えさせる手立て

教師の説話等、具体的な事例の紹介や提示


③ 考えの変容に向けた手立て



内容項目が重なる読み物教材と放送教材の選定

「特別の教科 道徳」の授業に取り組むにあたり、読み物教材の使用を中心に各内容項目の授業を行った。いくつかの内容項目を積み重ねた後、それらの内容が関連付けられた NHK for School の番組の視聴と読み物教材の活用を続けて行うことで、生徒の心の揺れや考えの変容が表れやすいような授業を展開した。

3 研究成果と今後の課題

(1) 使用した教材と生徒の考えの変容

		教材名「二通の手紙」(読み物教材)	教材名「おくれてきた客」(放送教材)
場面①	人物	高校生くらいの2人組 (挿絵には表されていない)	若いカップル (番組内に登場する) 
	状況	・入園終了時刻を数分過ぎた時	・「本日閉館」の札をかけた時 ・最終日の閉館時間は1時間早い
	教材	受付係が入園を断る	警備員が入場を断る
	生徒の考え	全員:「入園を断るのは当然だと思う」	全員:「もう少し早く来れば良いと思う」
		教材名「二通の手紙」(読み物教材)	教材名「おくれてきた客」(放送教材)

場面②	人物	2人の姉弟 (姉は小学校3年生程度 弟は3～4歳) (挿絵がある) 	女性2人(親子) (1人は年配 もう1人は若い女性) 
	状況	<ul style="list-style-type: none"> ・入園終了時刻過ぎ(数分過ぎ) ・弟の誕生日に大好きな動物を見せたい(今にも泣き出しそうな姉の願い) ・毎日終了間際に動物園をのぞいていた(時々、姉が弟を抱き抱えてもいた) ・小学生以下の子どもは保護者同伴でないと園に入ることができない ・親と一緒に来られないのは察しがつく 	<ul style="list-style-type: none"> ・閉館して30分後 ・最終日でなければ、まだ開館している ・美術展の絵は、母親の初恋の人(夫)との思い出の絵である ・初恋の人は亡くなってしまった ・遅れたのは、大雨の影響で電車が遅れてしまったから ・女性は長期入院中で、この日ようやく帰宅許可が出た。母親自身は、自分の命が長くないことを知っている
	教材	受付係が、規則違反を承知で、姉弟の入園を許可させた 閉園時刻になっても姉弟は出てこず、関係者総出で捜索にあたり見つける 後日、2通の手紙が届く 1通は解雇通告の手紙 1通は姉弟の母から感謝の手紙	警備員が入場させるかどうか悩みながら番組は終了する(オープンエンド) <ul style="list-style-type: none"> ・規則を守ることの重要性 ・女性の最後の願いを叶えてあげたいという思いやりの気持ち
	生徒の考え	A: 「入園させない」 (規則は規則で、守る必要がある) (子どもが嫌いだから) 他: 「入園させる」 B: (子どもがかわいそう) C: (他にも入園者がいるから ばれないだろう)	A: 「入館させてあげたい」 (女性の願いを叶えてあげたい) 他: 「入館させる」 B: (女性がかわいそう) C: (入館させた責任は自分とする) →警備員の仕事を辞める覚悟

(2) 考察

読み物教材の場面①では、生徒全員が教材と同じ考えであったが、場面②では、生徒の中で意見が分かれた。生徒が説明する理由から、聴覚的な支援と文字による情報提示では、教材で提示された条件が伝わりにくく、思考するための情報が足りていないように感じられた。また、理由を説明する際にも、「子どもは嫌いだから、我慢させる」といった、自分の好き嫌いだけで発言する場面もあった。これは、文章から登場人物の表情や心情などを想像することが苦手で、自分の主観だけで物事を考えてしまっていることが考えられる。想像したり考えたりすることは、読み物教材の良さでもあり、考えていく中で自問自答したり、他者の意見を聞くことで新しい気付きにつながることもあると思う。しかし、そこまで自分の力で行きつけない生徒にとっては、考えのきっかけやヒントとなる情報提示の工夫が必要だと思った。

放送教材の場面①では読み物教材の場面①と同じく、生徒全員が教材と同じ考えであった。しかし場面②では、読み物教材で「規則を守り、入園させない」と考えていた生徒が「女性の願いを叶えるために入館させてあげたい」と、考えが変わった。理由の中には「老人は大切にすべきだ」という考えもあったが、「子どもには次の機会があっても、老人には次の機会がないかもしれない」という考えがあった。これは視覚的な情報提示により、主観的な考えだけでなく、相手の置かれた状況などを客観的にとらえられたものだと予想される。

視覚的な情報とは、文章で説明されただけでは伝わらなかつたり、想像しにくかつたりする情

報と考へ、登場人物の話し方や表情の変化、細やかなしぐさなどがそれにあたると思っている。文章から情報を読み取ることが苦手な生徒でも、映像を見ることにより登場人物の背景や物語の流れがとらえやすくなる。読み物教材では、読み手の主観により情報のとらえ方には大きな差ができることもあるが、放送教材ではその差が小さくなり、生徒がより近い条件で考へやすくなるという良さがあると感じた。今回の放送教材では、年配の女性が閉館した美術館に入るのを諦めるシーンがある。「構わないのよ。ここまでやって、思い残すことはもうないよ」という年配の女性の会話だけでは、相手の心情を読み取るのが苦手な生徒は年配の女性を美術館に入れようとは考へないかもしれない。しかし、実際の映像では満足そうな顔をした年配の女性とは別に、母親の心情を察して今にも泣きだしそうな若い女性の表情や、複雑な心境で二人を見つめる警備員の態度が映されており、生徒は年配の女性の発言に疑問をもち、本心をごまかしているのではないかと考へる場面があった。

以上のことから、ごく少なく限られた条件や情報を伝えるのであれば、読み物教材や放送教材に大きな差はないかも知れないが、登場人物の置かれた状況や心情など、社会性を意識させた情報を伝えるのであれば、視覚的な支援が大きい放送教材の方が、より情報を伝えやすいのではないかと考へる。

(3) 成果と課題

放送教材を視聴することは、小さなころからテレビやインターネットを活用してきた生徒にとっては関心をもちやすく、生徒の意欲を高めることにつながった。また、実生活の場では限られた人間関係の中で生活している生徒にとって、自分が映像の人物の立場になって物事を考へることは、社会で生活する上でのスキルアップにも効果があると感じた。例えばオープンエンドの本番組の場合、視聴後に自分の意見を主張したり相手の考へを聞き入れたりする活動を重ねることで、社会性を養っていくことになるだろう。このように、放送教材を活用して生徒の視覚に訴えることは生徒の気付きや思考を促すのに効果があり、自分の主観だけで判断していた事柄に対しても客観的な情報から考へようという態度が見られた。

しかし、放送教材だけを活用することが生徒の考への変容や自己形成につながるわけではない。読み物教材には生徒の想像力や考へる力を高める効果も期待される。また、疑問に思ったり、分からなかったりしてもすぐに読み返すこともでき、何度も情報を確認していく中で新しい気付きにたどり着くことも期待できる。

今後の課題としては、放送教材の見せ方や扱い方があげられる。現在は教師の判断で番組を途中で切って意見や考へを出させ、そのあとに後半を見せて話し合いをさせている。このことで、生徒は限られた情報から自分の考へを出しやすくなっているが、番組全体を通して情報を整理したり、情報を覚えておいて考へたりできるようにもしていきたい。

また、年間指導計画の中での位置付けも考へていく必要がある。教科書の内容をいくつか積み重ねたうえで、関連した道徳の内容項目を扱った放送教材を扱っているが、授業時数との兼ね合いや生徒の実態から、どのタイミングで扱うかは今後の課題である。

読み物教材と放送教材における考への変容を比べる上で、似たような登場人物や状況の教材はあっても、全く同じ内容の教材はあまりない。例えば、「ごんぎつね」のアニメと文章を比べると、内容が同じでなければ生徒の考への変容については比べにくい。今回の教材でも同様に、似たような状況であっても登場人物も立場も違うのでは、道徳の内容項目については同じであっても、比較することは難しい。考への変容も大切にしつつ、様々な内容項目の積み重ねを通して、自分なりの考へや意見を確立できるようにしていきたい。また、読み物教材と放送教材を比べてどちらが良いとするのではなく、互いの良さを生かしながら生徒が社会の一員としてどのように社会性を養っていくか、どのような考へや価値観を身に付けていくかを大切にしたい。